



【令和6年度第3回企画展併催】 R6.12.20~R7.3.16

新平通信R7.1

《シリーズ》
後藤新平人脈考⑮

佐野 静子

7歳の時に後藤家に引き取られ、10年後の17歳の時、正式に養子縁組となった静子。医師佐野彪太と結婚し、碩（長男：演出家、作詞家、社会主義活動家）や新（三男：医師、佐野神経科の後継者）等を育てた。義弟に佐野学。

【略歴：後藤新平・和子夫妻の養女】

明治16（1883）年3月27日、名古屋にて誕生。戸籍上の名前は「志づ」。7歳の時に後藤家に引き取られ、新平と和子夫人のもとで養育される。

明治33（1900）年1月、後藤家と正式に養子縁組〔17歳〕。

明治37（1904）年11月、医師佐野彪太（30歳）と婚姻〔21歳〕。夫の仕事の関係で、中国（当時は清国）で生活していた時期がある。

昭和25（1950）年2月逝去。〔67歳〕



【義母和子夫人との関係】

新平と結婚してからなかなか子どもができなかったことを気に病んでいた和子夫人は、新平の名古屋時代の隠し子であった静子を養女にすることに快く賛成した。和子夫人は静子を実子にも及ばないほど大変かわいがり、静子も痛癢持ちの父親より優しい母によくなったという。

また、恥ずかしがり屋の和子夫人は買い物へ出掛ける時、必ず静子を伴った。そして自分は物陰に隠れていて、静子に「御免下さい」と言わせ、店の人が顔を出してから大急ぎで買い物をして帰るという風だった。



《義母 雋達》
画像：杵築市HP

【静子と佐野家の人々】

天保12（1841）年生まれ。杵築西上（現：大分県杵築市）の人。杵築藩医。明治13（1880）年設立の大分県病院兼医学校副院長兼副校長。緒方洪庵塾で蘭学と医学を、長崎ではポンペに医学をそれぞれに学んだ。杵築で開業。患者が門前市を成したという。藩校教授も勤めた。県内初の医学雑誌「碩田医報」を創刊するなど、近代大分の西洋医学に大きな足跡を残した。佐野家は、始祖の徳安（1603～1668）から400年以上も続く医家の家系。大正2年逝去。



とらた
《夫：彪太》

明治7（1874）年1月生まれ。佐野雋達の長男。明治34（1901）年、東京帝国大学医科大学卒業。脊髄脳神経系統学を専攻。明治37（1904）年、天津租界の日本共立病院院長時に静子と結婚。ドイツ、オーストリアに私費留学し、明治44（1911）年医学博士となる。日本に帰国後、東京神田小川町に佐野内科精神科病院を設立。大正12（1923）年の関東大震災の時、自宅が被災し、後藤新平宅に寄寓した。昭和31（1956）年12月、82歳で逝去。



せき
《長男：碩》

明治38年（1905）1月、中国天津生まれ。幼少時代に患った関節炎のため右足が曲がらなくなり、終生杖が必要な体となった。浦和高等学校時代に演劇活動開始。東京帝国大学法学部中退。新人会に所属し社会主義活動に興味を示す。移動劇団「トランク劇場」に参加。1929年結成の日本プロレタリア劇場同盟の中心的存在となる。演出家、作詞家、社会主義運動家。後半生はメキシコを拠点として演劇活動を行い、「メキシコ演劇の父」と称される。昭和41（1966）年9月、61歳で逝去。

明治25（1892）年2月生まれ。彪太の弟。東京帝大政治学科卒。法学士。満鉄の囑託を経て早大講師。新人会、早大建設者同盟、暁民会、文化会など指導。『解放』1921年7月号の「特殊部落解放論」は翌年の全国水平社創立に大きな影響を与えた。大正11（1922）年創立の日本共産党に入党。共産青年同盟責任者となる。翌年の第一次共産党事件検挙の直前、ソ連に逃れる。帰国後、『無産者新聞』を創刊、主筆となる。昭和4（1929）年上海で逮捕され14年間在獄。昭和28（1953）年3月逝去。



まなぶ
《義弟：学》